

ポスター番号9

実践発表

在籍学級と国際教室の教員が共に考える自主勉強会
—JSL 児童が「わかった」「楽しい」と思える授業を目指して—

加藤香代 (元川崎市立さくら小学校国際教室担任・早稲田大学大学院 院生)
田嶋麻理子 (川崎市立さくら小学校 国際教室担任)
笹明衣・新垣由香里・泉村美雪 (川崎市立さくら小学校 在籍学級担任)

1. 実践の場の特徴

実践現場は、全児童の1割強を外国につながる児童が占める外国人集住地域の公立小学校である。当該小学校では、多文化共生教育を各学年カリキュラムに位置づけている。ここ数年は日本語指導の必要なJSL児童が増加し、JSL児童のことばをどのように育てたらいいのか、国際教室、在籍学級共に担任は悩んでいる。そこで11月より国際教室担任と元国際教室担任(筆者)が中心となり、JSL児童の学びを考える教員の自主勉強会を立ち上げた。

2. 実践の目標

- ①国際教室と在籍学級の教員が情報・悩みを共有し、JSL児童の学びに活かす
- ②国際教室の学びと在籍学級の学びに連続性を持たせる連携を目指す
- ③日本語教育の知見と子どもの実態からの授業創りを立場の異なる教員が共に考える

3. 具体的な実践の内容とその過程

教員がJSL児童のどんなことに困っているのか実態把握のため全教員にアンケートを実施した。その結果、JSL児童の学級での人間関係や教科学習の支援に悩んでいることが分かった。第1回の勉強会では、アンケートをもとにそれぞれ教員の悩みを出し合った。勉強会は後行シラバスの形をとり、2回目からは勉強会をやりながらその中で立ち上がった課題を次の内容とした。勉強会(月1回会議等のない金曜日 15:45~16:45) (★勉強会から出てきた課題)

	内容	参加者の声と課題
第一回 (11月)	1. アイスブレイク(日本語ゼロでも可) 2. アンケートについて意見交換 3. 日常会話と教科で必要な言語 4. ワークショップ(カミンズ理論から)	<u>アンケートをもとに</u> 意見交換する中で同じように悩んでいることが分かった。日常会話と教科で必要な言語の習得に違いがあることから支援方法を考えたい。 ★学習に必要な言語の支援方法
第二回 (12月)	1. アイスブレイク(ことばで伝える) 2. 参加者の実践・JSL児童の様子 3. ことばの学びを支える実践 漢字中心に教員同士実践や悩みを話す 4. 支援の方法(スキャホールディング)	情報交換しながら他の先生の子どものかかわり方を聞いたこと、家庭環境や母語の有無も児童理解に大きくかかわることが分かった。漢字をどうやって教えるかそれぞれの実践が役に立った。次回は ★単元を決めて教科支援方法 を考える。
第三回 (1月)	1. 学習ゲーム(漢字バトル) 2. 最近の子どもの様子	ペアで支援方法を考えたことで自分では気づかなかった児童のつまずきや解決策

	3. 教材研究 (JSL カリキュラムの視点 ¹) 「どうぶつの赤ちゃん」(1年)	を考えることができ、すぐに生かしていきたい。★2年生の単元での教材研究
第四回 (2月)	1. 学習ゲーム (キーワードゲーム) 2. 教材研究 (JSL カリキュラムの視点) 「スーホの白い馬」(2年) 3. ケース会議 (4年 A児) ・在籍学級担任よりA児の長所と課題 ・国際教室担任よりA児の長所と課題 ・課題の背景と支援方法を考える	教材については国際教室との連携の仕方についても考えられた。ケース会議でクラスの児童を取り上げてもらえたことでその子の今の状態を見つめ直す機会となった。一人の児童を取り上げることで具体的にその背景や手立てを考えることができた。
次年度	《次年度取り組みたいこと》 ・各教員の授業実践報告 (深化) ・ケース会議 (A児以外のケース)	次年度は実際に授業を行い、それをもとに話し合っていきたい、定期的に個を追ったケース会議を行いたい。

4. 勉強会からの広がり

4.1. 第3回の勉強会 単元名「どうぶつの赤ちゃん」(1年)

単元での難しい言葉や欠かせない言葉を出し合い、JSL カリキュラムの日本語支援の5つの視点と照らし合わせ視覚支援やことばの言い換えなどペアで支援方法を考えた。在籍学級と国際教室でどのような連携を取ると効果的な学習になるのか勉強会終了後、1年生担任と国際教室担任が話し合い、JSL 児童を意識したカリキュラムを作成していった。

4.2. JSL 児童の児童理解

A児(4年)のケース会議後、在籍学級と国際教室の情報交換をより細やかに行う目的でこれまでの国際教室の学習内容を報告する指導記録から在籍学級と国際教室の教員が互いに児童について伝える場として記録を残していくことにした。効果をみて次年度は他の児童とも行っていく予定である。また、A児のもつ言語文化背景を考慮に入れた多文化共生の授業を国際教室担任がA児の在籍学級で行うことも計画している。

5. 結果と考察

1回目はアンケートをもとに各教員がJSL 児童に対しての悩みや学習支援方法など出し合った。回を重ねるごとに話し合いが活性化され一人一人の話す場が増え、勉強会の内容も参加者から積極的に提案されるようになった。3回目以降は国語の教材研究や個を追ったケース会議などより具体的な支援方法を協働で考えた。また勉強会の話し合いをもとに第1学年ではJSL 児童を考慮した単元カリキュラムを作成した。国際教室と在籍学級の連携を図った教育活動が展開されたことは大きな成果である。しかし、多忙な中での時間の確保や高学年の参加が難しいなど課題は残る。「国際教室だより」を発行し勉強会の内容は全教員に共有し全体に広げる努力を行っている。

在籍学級担任が他にもたくさん課題を抱えている児童がいる中でJSL 児童に目を向ける時間が増えたことはJSL 児童の学びにも大きく影響を与えるだろう。今後はさらに教員間の連携のあり方を深め、協働で授業実践の取り組みについて具体的に進めていきたい。勉強会が教員一人ではなかなかできないことでも仲間とやってみると行動に移せる、教員にとってJSL 児童について安心して「話せる場」になったという意義は大きい。

注) 1) 文部科学省「中学校教育におけるJSL カリキュラム(中学校編)」